ラパーチン、インナキェンチイ・アリクサンドラヴィチ

アムール地方における古代遺跡 49 箇所についての略報（部分）

Лопатин, Иннокентий Александрович. Некоторые сведения о 49 древних урочищах в Амурской стране.

Н. И. Шаброва (ред). Поронайск, 2017.

(Отрывок из личного издания редактора)

解題

鉱山技師ラパーチン（1839-1909）が 1867 年から 68 年にかけてサハリンで主に探鉱目的の野外調査を行い、その過程で多来加湖周辺の古代集落遺跡や、遺跡を残した民族についてのアイヌの伝承に関してロシア側で最古と思われる記録を残していることは本図書室で公開している『ロシア地理学協会時報』記事のとおりである。その後 1870 年 7 月までにラパーチンは極東調査旅行中に収集した考古学的な情報をとりまとめ、帝国考古学委員会 Императорская Археологическая Комиссия へ提出するとともに、東シベリアにおける古墳・古代遺跡発掘の許可を自らに与えるよう求めた。これが標記の「略報」であり、後年シベリアの古代遺物の収集家として知られるようになるラパーチンが考古学への関心を本格化させつつあったことを示す文献である。なお、パラナイスク郷土誌博物館研究員のガルブノフ氏によると同じ「略報」の手稿はロシア科学アカデミーサンクトペテルブルグ支部にも所蔵されており、ラパーチンがアカデミー会員 Ф.Б.シュミットに提供したものではないかという。

1870 年 11 月に考古学委員会で受理された「略報」は現在サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー物質文化史研究所（ИИМК）文書館に所蔵されるが、従来内容の一部が紹介されたのみ（Клеопов 1964: 50-53 ほか）で未刊であった。しかし先頃、スタラルースカヤ在住の歴史家シャブローヴァ氏の校訂による現代表記文が発行されたので、ここではその末尾の、サハリン島における知見を記した 46~49 節を翻訳した。ここにはラパーチンがサハリン島で 3 箇所の竪穴住居跡群を調査した正確な日付が示されている。

内淵川河口に近い白鳥湖北東岸の遺跡でラパーチンが初めて竪穴群を確認した 1868 年 4 月 28 日はグレゴリオ暦では同じ年の 5 月 10 日にあたり、この日付けは「サハリン考古学の日」として州内で記念されている（ガルブノフ 2015：6）。折しもこの発見から 150 周年を迎えるのを記念する意味で、本図書室でもこの記事を公開することにした。このようにサハリン州での竪穴群研究史の出発点は比較的明瞭なのだが、一方北海道における竪穴群調査の起源をどの日付けに求めるべきか、我々は今のところ明確な材料を持っていない。

底本の校訂者ナヂェージダ・イヴァーナヴナ・シャブローヴァ氏と、シルギェイ・ヴィチスラヴォヴィチ・ガルブノフ氏には多くの御教示をいただいた。また野村崇先生には文献の借覧についてお世話になった。いずれも深く感謝申し上げたい。

（西脇対名夫）

氏江敏文 1989「サハリンの遺跡紹介」『名寄市郷土資料報告』4　45~49

シルギェイ・V・ガルブノフ（西脇対名夫訳）2015「インナキェンチー・A・ロパーチン―サハリン初の地質学者・考古学者―」『北方博物館交流』第 27 号　4~7

杉浦重信 1995「北サハリン・アレクサンドロフスク土城について」『北方博物館交流』第 8 号　4~8

新岡武彦・宇田川洋 1990『サハリン南部の遺跡』北海道出版企画センター

野村崇 1990「早春のプガチョヴォ・ネフスコエ湖岸の考古学的調査」野村ほか『サハリン発掘の旅　樺太・風土と文化史的世界』日ソ極東・北海道博物館交流協会　14~76

Клеопов, И. Л. И. А. Лопатин. Очерк жизни и научной деятельности. Неопубликованные дневники, письма. Иркутск: Восточно-Сибирское книжное издательство, 1964.

XLVI

コサックの 3.M.ビェルキン中尉から 1868 年 7 月に聞いたところでは、サハリンのドゥイ川（ドゥイ哨所よりも北にある）沿いの流刑囚の村の近くに何か古代の土手があって、多分人間の手になるものだろうという [1]。

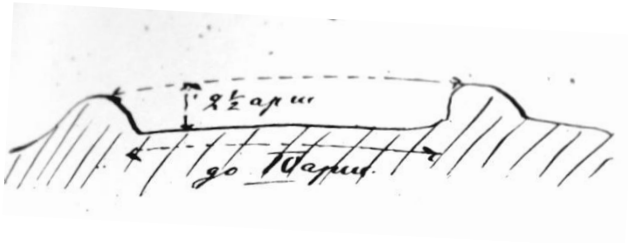
XLVII

1868 年 4 月 28 日に私はサハリンの石器時代に属する古代遺跡を調査したことがある。遺跡はオニェナイ川がオホーツク海にそそぐ河口（ナイプチ）から遠くない、ロシアのナイブチ哨所に近い湖の岸にある [2]。オニェナイ川につながっているこの湖をアイヌは「ナイプチトー」と呼び、ここで測量をしたロシアの地形図作者たちは「リビャージエ・オーゼラ［白鳥の湖］」と呼んでいる。湖の北岸に接して湿原があり、その背後に細長い土地の高まりがあって、大方疎林に覆われており、目下その一部にナイプチ哨所守備隊兵士の菜園が設けられている。

この土地の湿原からの高さは 1 サージェン［約 2.13m］足らずに過ぎない。菜園として区画する際に牙一対をはじめイノシシの骨（この動物は現在サハリンにはいない）、石斧 3 点、加工のある石片及び多数の土器片が見つかった。今は耕起された緩斜面の菜園の背後から始まって、相互にいくらも離れず、所によっては列をなした穴が途切れることなく続いている。

これらの穴は二群に分けられる。第一は東側の 33 基で、大きさは概ね、底面で 6 から 8 平方アルシン［1 平方アルシンは約 0.51m^2］である。より西側にある第二の群では 38 基の穴があり、穴の底面の規模は 10 平方アルシンに達する。この種の穴の横断面はこのページに描いて示したようなものになる [3]。

この第一群の土小屋の中に針葉樹が生えているのを見つけたが、太さは根元のところで 7 ヴェルショーク［約 31.2cm］あった。第二群の土小屋では根元の径が 10 ヴェルショーク［約 44.5cm］に達する木が見られた。とある木の生えていない、低みに位置する場所では穴の中に太さ 2~3 ヴェルショークの、柱の端がいくつかまだ腐りきらずに残っているのを見つけた。これらの穴は、その断面図に見られるとおり小さな土手のようなもので囲まれている。



二つの穴のこういう土手の間は往々1 アルシン半［1 アルシンは約 0.71m］から 2 アルシン未満しか離れていない。それほどこれらの建物は密集しているのである。これらの大型の穴のほかに、私はこの（穴のある）高まりの中の低みで小さく落ち窪んだ穴をいくつか見たが、底の大きさ 1 平方アルシンで深さも大したことはなかった。そのほかに墓場に生じるような、地面の落ち込んでいる箇所が複数見られ、これは二群の土小屋の跡の外部にあった。

我々はこれらの穴の間のある場所で何箇所か地面を掘ってみたところ、どこでも粗雑な作りの非常に質の悪い、焼きの悪い土器の破片が見つかった。これらの土器片には常に何かしら装飾文様があった。

同様な土小屋の跡はオニェナイ川の岸にもあり、それはナイプチ哨所より少し上流のアイヌの集落トゥイウコイのあたりである。

—

注意すべきは、少数のアイヌが今も冬に林の中に土小屋を作って住んでいることである。こうした新しい土小屋の床は約 6 平方アルシンかそれ以上ある（私もかつて自分で測ってみたことがある）が、深さは［古代のものより］浅いように思われる。

この遺跡から得た古代の器物は私のところにあるほかに、ナイプチ哨所の隊長であるガリズィーン少尉補も持っている。

XLVIII

1868 年 5 月 24 日、私はアイヌの集落マグンカタンの、日本の建物の背後でナイプチのものと同様の穴を見たことがある。この集落は東海岸にある同じマグンカタンという名の入江に接してマヌエ哨所の北にある [4)]。ここの穴も形や規模はナイプチ哨所付近の穴居跡と同じである。またここで私は古代の土器片を少し発見し、アイヌたちは、日本人の建物の基礎穴を掘った時には完全な形の素焼きの壺をいくつか見つけたと話していた。

注意すべきは、現在のアイヌは土器の壺も石斧も使わないだけでなく、人間は昔こうした石斧で木を伐っていたのだ、と話しても我々を疑いの目で見るのである。彼らは土器の破片だけを人の作ったものと認めている。私はアイヌからそのように聞いたことがある。土小屋を作り素焼きの壺を用いた人々のことをアイヌたちはトイジと呼び、伝説によればこの人々は北方へ去ったのだという。

XLIX

1868 年 6 月 1 日、私は現代のアイヌ集落タライカのある場所で、すでに説明した 2 箇所と同様な古代遺跡を調査したことがある [5)]。タライカはタライカ湖からサハリンのチルピェニヤ湾へ流出する水路の起点側の左岸に位置しており、ここではアイヌの小屋の間にしばしば古代の穴があって、その底面の規模は 1 から 2 平方サージェン［1 平方サージェンは約 4.55m^2］、深さはこれらと全く同様なナイプチの穴より浅い。

タライカ湖から流れ出す水路に沿ってこれらの穴は 300 サージェン［約 640m］を超える距離にわたって続いている。ここでは水路の水が岸辺の土からナイプチのものと同様な古代の素焼容器の破片を洗い出している。私は岸辺の水際のところで壺の破片のほか（そのうちの一つは川岸の崩れた場所から引き抜いた）、多数の石斧を発見したが、その一部は完成し、また一部は見たところ半製品の状態であった。

石斧は全て硬い暗色微晶質の火成岩で作られ、まず始めは河川の礫を打ち割って加工し、その後さらに多少なりとも平滑に整えられたものと認められた。こうした古物を私は平坦な岸辺、特に川の水が岸の一部を洗掘して古代の穴居跡を破壊したと思われる場所で発見した。

ここの地盤は砂でできており、砂には小砂利や、時にはかなり大きな礫が混じっている。この村のアイヌの話では、土地を掘り返すときには時に完全な形の素焼の壺が見つかるが、これは古代のトイジ人が作ったものだという。

しかし石斧については彼らもまた、人間が作ったものとはみなしていない。

インナキェンチイ・ラパーチン

ロシア地理学・鉱物学協会会員、鉱山技師

1870 年 7 月 20 日　サンクトペテルブルグ

訳注

1）1921 年に鳥居龍蔵が調査したことで知られるアレクサンドロフスクの土城（杉浦 1995 ほか）であろう。

2）ガルブノフ氏によると、現在の名称はナイブチ 1［Найбучи 1］遺跡。邦領樺太時代には詳しい記録がないようだが、昭和末年の日本人訪問者による紹介がある（氏江 1989：47、新岡・宇田川 1990：183~186 ほか）。氏江氏によると、1988 年当時 300 基ほどの竪穴があるとされていた。

3）図には竪穴底の径が 10 アルシン［約 7.11m］未満、周堤から底までの深さが 2 アルシン半［約 1.78m］とある。

4）ガルブノフ氏によると、現在の名称はウスチ・プガチョーヴァ 1［Усть-Пугачёво 1］遺跡。1989 年に現地を訪れた野村崇氏の紹介がある（野村 1990：26~30）。

5）ガルブノフ氏によると、現在の名称はプラムイスローヴァヤ 2［Промысловое 2］遺跡。有名な東多来加貝塚の所在地である。